

園だより

No.3

R7.5.20

大沢幼稚園園長 長友 六月

TEL (762) 4389 (代)

FAX (762) 4386

<http://www.ohsawa.ednet.jp/>

緊急連絡先 090-3693-9673

この地域で昔から田植えをする頃（6月の第2週）。入梅を迎えるこの時期は、そろそろ、安心して過ごせるようになってくる頃です。それまでもうしばらく、慌てずにいきましょう。そして、今一度、我が子が「何をして遊んでいるのかな。誰と遊んでいるのかな。何に興味を持っているのかな」ダンゴムシやカタツムリを探して葉っぱや人工芝をひっくり返し、アリやミミズを見つける子。砂場で仲間と夢中になって遊ぶ子。おままごとをする子……。遊ぶ姿から子どもたちの心の中を理解する大事な時期です。

安全・保健からのお知らせ

○子どもの水分補給量の目安は以下の通りとなっています。参考にしてください。

＜飲料水+食事・おやつからの一日に必要な水分量の目安（体重 1kg あたり）＞

新生児：50～120ml 乳児：120～150ml 幼児：90～100ml

大人に比べ、幼児は2倍、乳児は3倍もの水分摂取が必要です。理由としては、子どもは体内に占める水分率が高く、体が小さいにも関わらず大人同量の汗腺を持っているためです。また、子どもの体温は大人より高いため、気温が高くなると深部体温が大人よりも上がりやすいということも関係しています。

気をつけたい脱水のサインは、①唇がかわいている。②尿の回数や量が少ない。

③尿の色が濃い。④目がくぼんでいる。などです。

水分補給のポイントは、①起床時と就寝時 ②食事やおやつの時 ③出かける前と帰宅後

④運動前と運動後 ⑤入浴前と入浴後に一度にたくさん飲ませるのではなく、こまめに少しずつ与えることがポイント。

※職員は定期的に水分補給を促し、水筒の中身がなくなった場合は、園で用意した主に水を補充しますが、帰宅後に補給量が気になる場合は、担任にお知らせください。

お知らせ

○高校生以上の社会体験の一環の場として、園を活用して欲しいと思っています。園児の兄姉や従兄弟、幼稚園・保育所の先生を目指している生徒さん。園児にとっては、異年齢との関わりが大変大事です。

学校の休みの日に待っています。お知らせください。

作詞 茶木 滋

作曲 中田 喜直

めだかがっこう

- めだかがっこうは かわのなか
そっとのぞいてみてごらん そっとのぞいてみてごらん
みんなでおゆうぎ しているよ
- めだかがっこうの めだかたち だれが
せいとかせんせいか だれがせいとかせんせいか
みんなでげんきに あそんでる
- めだかがっこうは うれしそう みずにながれてつーいつい
みずにながれてつーいつい
みんながそろって つーいつい

環境意識を育む教育「森の幼稚園」

森で子育て デンマークのスコヴバーネヘンと呼ばれている「森の幼稚園」の施設には、日本のようにクラスごとの部屋などではなく、備え付けの遊具もない。子どもたちは毎日を森の中で過ごし、四季による森の変化に想像力を育み、自然の中で遊び方を考えて自由に遊ぶ。よほどの悪天候でない限り、雨や雪の日はもちろん、気温がマイナスを示す一月の寒い冬の時期でも、毎日を森の中で遊んで過ごすことが基本となっている。

「森の幼稚園」はある女性の子育てから始まった。今から 60 年以上前、当時デンマークでは幼稚園が不足しており、母親である彼女は自分の子どもの保育のために、子どもたちを森に連れて行き遊んでいたところ、近所の人々も自然の中で保育する彼女の教育方針に賛同し、ヨーロッパで初めての自主運営による「森の幼稚園」を開園させた。

育つガマン強さ 「森の幼稚園」では、先生は子どもの遊びに干渉せず、見守っている。それは、大人が遊び方を提供してしまうと、子どもの豊かな想像力を広げることができないため。そして、先生は子どもたちが自身で物事を行うことを促し、子どもたちがやり遂げることのできる時間を十分に与える。森へ出かけるための準備なども子どもたちは自分で行き、先生の手を借りることはない。多くの子どもたちは、泣き出したりだだをこねたりということはなく、笑いながら困難を楽しんでいるようだ。さらに、子どもたちは自然の中で遊ぶことで、危ないこと、やってはいけないことなど、さまざまなことを経験し学ぶ。それに気がつくことを先生たちは見守りながら待つ。

「森の幼稚園」の訪問者が特に驚くことは、子どもたちの忍耐強さと大人たちの辛抱強さだ。

子どもたちは、森の中の不便な道のりさえ、自分の力で乗り越え、先生はその姿に手を差し伸べたくなる気持ちを抑えて辛抱強く見守る。保護者はいずれも、この保育方法を信頼し、子どものケガなどに対しても理解を示している。

森とのふれあい そしてこの保育方法で育てられた子どもは、落ち着きのない行動をとるような精神状態になりにくいとされ、健全な精神育成の方策としても期待されている。幼いころの自然へのふれあいや森での動植物を思いやる日々は、身体能力やコミュニケーション能力、創造力を養うことが可能だ。
(以上 環境新聞から)

この記事はデンマークやヨーロッパで広がる子育て方法で、日本の子ども達を取り囲む社会（仕組みを含めて）の中では、現実問題、難しいところですが、自然とどのように関わるか、その環境を整えるかを考えます。自然と関わる方法は、大きく二つの方法があります。ひとつは、子ども達を自然の中へ連れて行くこと。もうひとつは、自然を子ども達のところへ持ってくること。園外保育、サマーキャンプ、お散歩にでかけることはもちろんです。そして、ヤギやカメ、植物に集まる昆虫などの虫たちも可愛がり、園舎の中にもその季節の花や装飾を持ってくることで、子ども達と自然との関わりと考えます。

もうひとつは、記事の中の「子どもたちの忍耐強さと大人たちの辛抱強さ」この言葉は大沢の「待ちの保育」とも共通するところです。大人が何かを教えること以上に、子どもどうしの関わりの中で学ぶことが多いことは、皆さんも承知の通りです。園においては、“生活を創るのは子ども達”という考えのもとで我々教職員は過ごしています。家庭においても、同じであると思います。大人が手を出す、口を出す方が時間はかかりません。手間も省けますが、ひとつひとつが子どもにとっての大切な経験となり、学び（生活を広げる）であると思います。同時に大人（親）にとっての学びでもあると考えます。